



深さ34mの発進立坑。ここから約2kmを掘り進めるシールド工事が児玉の担当する現場だ。

輝け! けんせつ小町

# 現場監督

## 児玉ひと美

佐藤工業株式会社 東北支店  
原町東部幹線作業所



「けんせつ小町」は、  
日建連が定めた建設業で  
活躍する女性の愛称です。

大学時代に参加したインターンシップで出会った女性技術者に魅せられ、この業界を志した小町。佐藤工業(株)初の土木系女性現場監督として数々の現場に従事し、工事主任として活躍する今の姿は後輩たちから憧れの存在となっている。

### 女性技術者の働く姿に魅せられる

大勢の人が使う大きなものが作りたいと思い、工学部環境建設学科で土木分野の学業に励んでいた児玉は、三年生の夏休みに三週間、地下鉄工事現場のインターンシップに参加した。「その現場には入社三年目の女性の現場監督

がいたのですが、その方の働く姿がとても良かったです。よく私もこういう仕事をしたいと思って施工管理に興味を持ったんです」

就職活動の際は、建設業界で働いている叔父の助言を参考にしただけ。

「いろいろな会社の中でも佐藤工業は雰囲気や社員の人が非常に良く、性格的にも合うと思うよ」と言われたんです。同じ業界の人から客観的に評価される会社ですごく魅力的だと感じ、ここで働きたいと決めました」

インターンシップを通して共に働く人の重要性も知った児玉は二〇〇五年、佐藤工業(株)に女性初の土木技術者として入社した。

### 忘れられない初現場

児玉が最初に配属されたのは、宮城県で建設が進む二ツ石ダム工事現場だった。初めての現場、自身の地元ということもあり、気持ちの入れようはとても大きかったと児玉は振り返る。

「工務担当の配属だったので、業務の内容は発注や積算が主でした。事務所での作業が多く、イメージしていた仕事とちよつと違うと感じるようになりました」

空き時間を見つけては先輩から現場の仕事を教わっていたが、一緒に配属された同期の男性は現場監督として働いており、その姿を見ると更に焦りと違和感が大きくなっていった。想いが募った児玉はついに上司に直訴する。

「現場に出して欲しい」と我慢できずに言っていました。困らせてしまったかもしれませんが、私の気持ちも汲んでくださり、現場業務を兼任することができました。私の粘り勝ちですね(笑)」

一年目というところを感じさせない児玉の負けん気の強さに周囲は驚きと期待を寄せただろう。

### 自分たちが終わらせる

児玉はダム工事の後、地下鉄工事を経て二〇一二年に現場監督として造成工事を担当した。この現場の工期はとても短く、四苦八苦しながらいろいろ学んだ印象的な仕事だったと言う。

# my Beginning

## 女性技術者の姿に憧れて

私が建設業界に入った理由

my style

7年ほど前から週に1度、生け花教室に通っています。祖母が習っていたことがきっかけで始めて、家で祖母から教えてもらったりすることもあります。家元3級という免許もとったので教室を開くこともできます。何かをつくるのが好きなので、テーマに沿って、どういう風に形作るか考えながら進めていくことがすごく楽しいです。



年に1度行われる展覧会で児玉が出品した作品。



右/掘り出された土を搬出するところ。声を出して安全確認をする。  
上/シールドマシンのオペレータと進捗の確認をする児玉。モニターでも確認できるが、直接話すことを大切にしている。  
下/工事事務所の皆さん。前列の右端が倉田所長。



my Growing

私が建設業界で学んだこと

何とかするのが私たちの仕事

「この現場で先輩に『終わらない現場はない』というのは、少し違う」とよく言われました。終わるのを待っているようでは仕事はうまくいかない。『限られた時間の中で何とか終わるように段取りを組むのが自分たちの仕事』という言葉に胸に短い工期を乗り切りました。この現場に限らず様々な経験をしたなかで、昔も今も仕事の魅力は変わらないと話す児玉。

「自分で考え段取りした通りに進むのがとても嬉しくて、その快感が『次も、また次も』と新しいことに挑戦する力になっています」

うまく現場をまわすことに大きなやりがいを感じる児玉は、もがき苦しんだ時間を乗り越え、終わるのではなく終わらせる。という想いでどんなことにも真摯に取り組みようになる。

一言の重みを実感する

今年で入社十二年目となった児玉は、二〇一五年六月から担当している雨水幹線工事二度目となる工事主任を任されている。

「現場に出たら主任も担当職も大きな差はありませんが、現場全体を任されているので私の一言一言が成功と失敗に繋がります。なので言動には特に気を付けながら毎日現場に出ます」

自分の考えを齟齬なく伝えることが難しく、それがきっかけの苦しい思い出もあるという。

「自分が思い描くものをまず伝え、それをかたちにするためにこれをして欲しいと一歩先ま

で伝えることを心掛けるようになりました。また、まとめるのは私ですがみんな現場を進めているということを常に頭に置いています」

倉田所長は児玉についてこう話す。

「児玉はチームリーダーとしてあらゆる側面から現場を見て判断し、きめ細やかに対応できる技術者です。現場で生じるどんな問題に対しても真摯に向き合い、責任を持ってその解決にあたる姿にはさすがだと感じます」

この現場には、入社二、三年目の女性技術者が一名ずつおり後輩の教育にも尽力している。

「若手職員の教育も大事な仕事ですね。ただ一回りも年が離れている後輩と一緒に仕事をするのは初めてなので、若い人たちがどういうことで悩んでいるのか分からない時もあります。一人ひとりと密にコミュニケーションをとり、なんでも話せる関係になりたいですね」

新しい働き方を模索する

児玉はシールドによるトンネル掘削を主とする今の現場で、新しい働き方に取り組んでいる。「現場ではシールドマシンの掘進を遠隔で監視できるシステムを導入しており、掘進の状況は家でも確認ができます。現場が動いているとどうしても気になってしまうものですが、いつでもどこでも確認ができるという安心感があります。現在は人員の調整と引き継ぎを徹底して週休二日となるように取り組んでいます」



「働く前は不安も少しあったんですが、ひと美さんがいてくれたことが本当に心強く頑張れたところもたくさんあります」(萩原(中央))  
 「入社前に現場見学会で一度お会いして話をした時からとてもかっこいいなと思っていました。一緒に働くとその想いはどんどん大きくなり私の目標としている存在です」(小川(左))

## profile



こだま・ひとみ ●1981(昭和56)年、宮城県生まれ。工学部環境建設学科を卒業後、2005(平成17)年、佐藤工業(株)に女性初となる土木技術者として入社。ダム工事、地下鉄工事、造成工事と多様な経験を積み、2015(平成27)年6月より配属された雨水幹線工事では、2度目となる工事主任を任され、2名の若手女性職員の教育、現場の働き方改革にも取り組み現在に至る。

また、体力勝負で夜勤もある職種という点で建設業と似た仕事である医療や介護関係の職に就く友人と情報交換をして、他業界の働き方から学べることはないかと模索もしている。

「三交代制が定着している業界は、結婚や出産などのライフイベントにあわせて働く時間の融通が利くので働き続けやすいと聞きました。建設業界にもそのような制度が整備されれば、女性が更に増えてくる気がします」

どこの現場でも上司、先輩は男女隔たりなく叱咤・指導してくれたと話す児玉の目標は、この先も現場に出続けていつか所長になることだ。『女性だからと難しく考えないで』と未来の小町にエールを送ってくれた。

繊細さと頼もしさを兼ね備えた児玉は、かつて背中を追った女性技術者のような存在へと成長し、今度は誰かの憧れの存在になっている。

my **Growing** 私が建設業界で学んだこと